特集

ふくしまの城・城絵図

棚倉城、小峰城の築城に大きな功績を遺した丹羽長重（1571-1637）が逝去してから、今年でちょうど380年。『日本城郭大系 第3巻』（創史社 1981）によれば、県内には大小含め1,125の城館が存在したとされています。戦火や明治の廃城令等により当時の建造物はほぼ失われていますが、会津若松城（鶴ヶ城）をはじめとする歴史上の舞台となった城々は堀や石垣等が復元・整備され、現在も重要な史跡として人々に親しまれています。

今回の特集では、県内にかつて存在した城々を、当館所蔵の「城絵図」とともにご紹介します。城郭のみならず城内外の構造が一目で分かる「城絵図」を、築城された場所や理由、戦いの歴史と合わせてご覧ください。なお、当館では平成29（2017）年4月7日（金）～30日（日）にかけて、企画展示「城絵図展～ふくしまの城絵図を中心に～」を開催します。城絵図の現物を直接見ることができる数少ない機会ですので、ご来館いただければ幸いです。

（地域資料チーム　阿部　誠）

棚倉城

所在地：東白川郡棚町棚倉　別称：近津城，新土城，亀ヶ城
種別：台城　規模：総面積 72,270 ㎡，標高 375m

【築城】

元和 8（1622）年に棚倉五万石を拝領した丹羽長重が、幕命を受け寛永元（1627）年より築城に着手しました。寛永 4（1630）年にほぼ完成しますが、未完のまま丹羽家が白河へ移封したことから、明治維新まで城壁が荒土のままとなってしまいました。別称としては近津明神の跡地に建てたことから「近津城」、壁が荒土のままであったことから「新土城」、お堀に住む大亀が水面に浮かぶと決まってお殿様が転封されたことから「亀ヶ城」等があります。

【近世～戊辰戦争】

棚倉城は丹羽氏の築城以来 8 家 16 代に渡って城主が変遷し、16 代目の阿部正静の代に戊辰戦争を迎えます。棚倉藩は奥羽越列藩同盟に参加し新政府軍を迎え撃ちますが衆寡敵せず、慶応 4（1868）年 6 月 24 日、わずか 1 日で落城しました。

【現在】

本丸および水掘が亀ヶ城公園として整備されており、本丸の堀・土塁がきれいに残存しています。

【当館所蔵絵図】

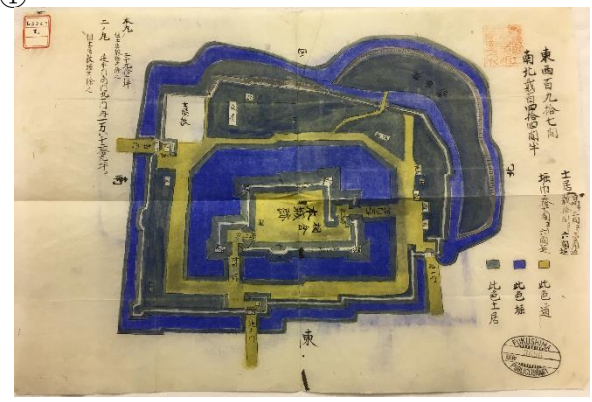
①『棚倉城郭絵図』〔出版者・出版年不明〕
26×40cm

棚倉城の廃城後に描かれたと見られる城跡周辺の絵図です。道・堀・土居が色分けされている他、本丸・二ノ丸の面積や東西・南北の長さの記載があります。

②『棚倉城外地割絵図』
〔出版者・出版年不明〕　74×133cm

①と同じく廃城後の絵図と見られます。本丸跡を中心とした地割図で、城下町の屋敷・丁掘・土居・堀川・道・寺院・町が色分けされている他、貸地や未割付の区画にはその旨を書いた紙片が貼付されています。

①



②

小峰城

所在地：白河市郭内　別称：白河城
種別：平山城　規模：不明

【築城】

『白河風土記』によれば、興国～正平年間（1340～1369）の頃、白河庄を治めていた結城宗広の嫡男親朝（別家小峰家を興す）が築城したとされています。

【中世】

永正 7(1510)年に起こった「永正の変」により、小峰家の血統による「白河結城氏」が創設され、結城氏の本拠もこの頃白川城から小峰城へと移りました。その後天正 18（1590）年の奥州仕置による結城氏の改易や蒲生氏、上杉氏の支配を経ながら、小峰城および白河城下の骨格が出来上がっていきます。

【近世】

寛永 4（1627）年、丹羽長重が棚倉より十万余石で移封し、白河藩が成立します。長重は幕命により同 6（1629）年から約 4 年の歳月をかけて小峰城の大改修を行いました。行われたのは堀の整備や本丸・二の丸の総石垣化等で、北奥羽の外様大名に対する押えの城としての重要な位置づけであったことが分かります。

江戸後期には松平定信が二ノ丸、三ノ丸を整備し、蔵や役所等の公的施設を置きました。また、約 5 年の歳月をかけて三ノ丸東側に広大な屋敷地を造成し、御殿や庭園からなる「三郭四園」を造り上げています。

【戊辰戦争～現在】

小峰城は慶応 4（1868）年に戊辰戦争白河口の戦いで落城・焼失し、廃城となります。城跡には曲輪・土塁・石垣・水掘を残すのみでしたが、平成に入ると三重櫓や前御門が復元され、平成 22（2010）年には国の史跡に指定されました。翌年の東日本大震災によって曲輪・石垣が大きな被害を受け、本丸が立入禁止になりますが、修復作業を経て平成 27（2015）年 4 月から入城可能となり、現在も石垣の修復が進められています。

【当館所蔵城絵図】

①『陸奥国白川城之図』〔出版者・出版地不明〕1779 27×13cm

当時の小峰城を描いたもので、本丸北方の石垣が高さ十二間、横十八間に渡って崩落した際の記録であることが読み取れます。「松平越中守」の名前も見られます。（裏表紙画像）

②『白河旧城内図面并上申書』
〔出版者不明〕1876
28cm（冊子）　50×70cm（絵図）

冊子体の資料で、城跡および城下町の図面が複数綴じられています。

②

二本松城

所在地：二本松市郭内　別称：霞ヶ城，白旗城
種別：山城⇒平山城　規模：標高 345m，比高 120m

【築城】

二本松城の築年に関しては諸説ありますが、応永 21（1414）年に畠山氏 4 代・満泰が築城したとの説が有力です。奥州探題であった満泰は当時居館であった田地ヶ丘の館では攻防に不適と考え、東方にある霧山、白旗ヶ峯の山上に城を築き拠点としました。南・西・北方を丘陵に囲まれた天然の要害であり、その規模は東西 2.5km、南北 1.8km といった広大なものでした。

【中世～近世】

二本松城は、天正 14（1586）年に畠山氏と伊達氏との戦の末落城、畠山氏自らの手によって本丸に火が放たれています。その後蒲生氏や加藤氏の支配を経て、寛永 20（1643）年に二本松入府となった丹羽氏によって本丸や石垣等の大改修が行われ、以後改修を重ねながら明治維新までの 200 年以上に渡り、丹羽氏の居城となりました。

【戊辰戦争～現在】

戊辰戦争の戦火により城や城域内の建物はほとんどが焼失・破壊され、残る建物も明治 5（1872）年の廃城令によって取り壊されましたが、昭和 57（1982）年、箕輪門と附櫓が復元されました。また、平成 5（1993）年から平成 7（1995）年にかけて本丸の修復、復元工事がなされ、天守台や本丸石垣が整備されています。平成 18（2006）年には国の史跡に指定されました。

【当館所蔵城絵図】

①『二本松旧城内之全図』安斎嶂渓／製図
安斎嶂渓 1902 40×55cm

明治期に描かれた、旧二本松城および城下の絵図です。城はこの時期には取り壊されており確認できませんが、石垣や山頂の城跡、御殿等の建物の配置が細かく描写されています。

①

福島城

所在地：福島市杉妻町　別称：杉目城，大仏城
種別：平城　規模：400m×300m

【築城】

築城の時期は定かではありませんが、古代末期には信夫庄司佐藤一族の杉ノ目太郎行信の居館があったと『信達一統志』には記されています。また、その後の史料には伊達氏の支配する城として15世紀始め「大仏城」と呼ばれていた城が、天文22（1553）年には「杉目（杉妻）城」と改められていることが確認できます。

【中世】

蒲生氏郷家臣の木村吉清が居城を大森城から杉目（杉妻）城に移した際に「福島城」と改名しました。ただしこの城は豊臣秀吉の命令で文禄4（1595）年に取り壊され、堀や土塁のみが残されました。

【近世】

延宝7（1679）年、本多忠勝の子孫忠国が福島十五万石に転封となり、福島藩が独立。これに伴い福島城も支城から本城となります。この頃は天守のない陣屋構えの造りでしたが、堀田氏の時代に普請が本格的に始められ、元禄15（1702）年～明治2（1869）年にかけての板倉氏時代には御殿や大手門をはじめとした城と城下町が大きく整備されました。

【戊辰戦争～現在】

戊辰戦争時、福島藩は奥羽越列藩同盟に加盟して新政府軍と戦いますが、明治元（1868）年9月2日に11代藩主板倉勝尚が新政府軍に降伏し、福島城を開城します。その後福島藩は消滅。堀等は壊され、二ノ丸跡を中心に福島県庁が建設されました。

城跡は現在も福島県庁の敷地内に存在しますが、建物は勿論、遺構もほとんどが消滅してしまっており、辛うじて庭園跡や土塁が残存している状況です。

【当館所蔵城絵図】

①『福島旧城之図』福島県土木掛／編
福島県〔写本〕1875 18×13cm

福島県が誕生する前年のもので、「福島県土木掛福田正介写」と署名された実測図です。シンプルな絵図ですが、三ノ丸が取り払われている様が見える等、廃城の経過が分かる図となっています。

②『福島旧城郭絵図』〔出版者不明〕〔写〕〔明治初期〕116×134cm

表書きには絵図名と共に「仙台鎮台三好陸軍大佐へ相廻之候控也」とあります。絵図には建屋・土手・川・道が色分けされて描かれ、敷地内の立木本数が記載された紙片が貼付されています。

①

②

相馬中村城

所在地：相馬市中村　別称：馬陵城，夫館
種別：平台城　規模：（本丸）28m×112m

【築城】

『奥相志』によれば、大永年間（1521～1527)、宇多荘を統治していた「中村某」が樵夫の勧めで天神山に城普請を始めたのが相馬中村城のはじめとされています。樵夫が見立てた城であることから、当初は「夫館」と称しました。

【中世～近世】

相馬中村城は当初伊達氏に属する城でしたが、相馬氏 14 代相馬顕胤が天文 12（1543）年に支配下としました。その後慶長 7（1602）年から 10 年間の空城期間を挟み、慶長 16（1611）年 7 月より陸奥相馬中村藩初代藩主の相馬利胤が修城。同年 12 月には本拠を小高城から相馬中村城へ移し、その後廃藩までの約 260 年間、相馬氏の居城となります。当初は 3 層の天守が存在しましたが、寛文 10（1670）年に落雷によって焼失しています。

【戊辰戦争～現在】

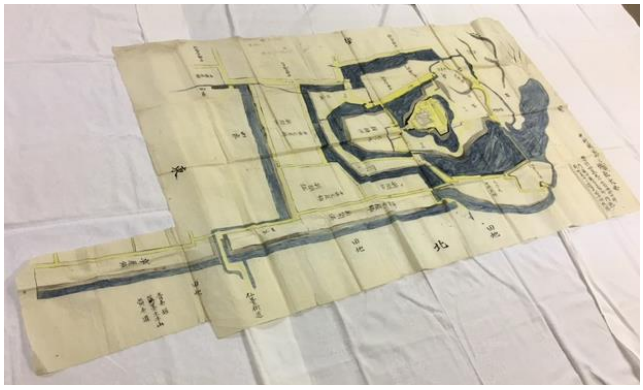
相馬藩は奥羽越列藩同盟に加わり棚倉や平で新政府軍と戦いましたが、慶応 4（1868）年に降伏したため相馬中村城は戦火を免れています。城郭は明治 3(1870) 年、新政府の命により廃城となり、城内の建物は全て破却されました。現在、城跡周辺は「馬陵公園」として整備され、大手門・石垣・土塁・堀が現存しています。

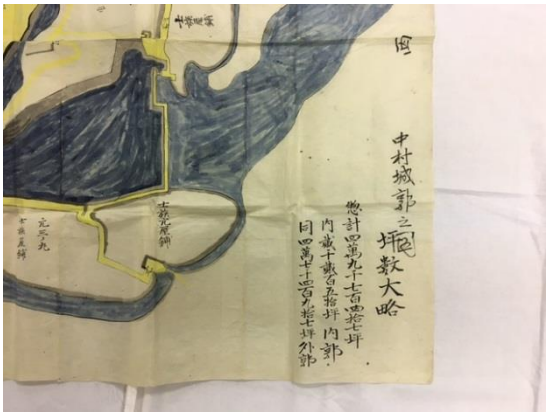
【当館所蔵城絵図】

①『中村城郭之図』[出版者・出版地不明]
200×340cm

標題とともに敷地面積（総面積・内郭・外郭）が併記されています。また本丸の間取りが細かく描かれており、広間等の位置も見られます。城外は区域ごとに士族屋敷, 町屋等の使途が記載されており、元の二ノ丸が繰練所となっている事等も確認できます。

①





磐城平城

所在地：いわき市平　別称：飯野城，龍城
種別：台城　規模：700m×500m

【築城】

関ヶ原の戦い後、岩城氏に替わって慶長 7（1602）年に鳥居忠政が磐城へ入府します。忠政は「磐城には館はあっても城はないので適当な場所を見立てて城を築くように」との徳川家康の命を受けて、慶長 8（1603）年に築城を開始しました。完成までには 12 年もの年月がかけられ、盲人までもが使役されたといいます。平城に天守はなく、それに相当する「三階櫓」が建てられました。また城中央の水堀「丹後沢」は、堤防工事が難航した際に、「丹後」という老人を人柱に立てたことから名づけられたと伝えられています。

【近世～戊辰戦争～現在】

磐城平藩初代藩主の鳥居氏が元和 8（1622）年に新城構築等の功績で山形転封になった後は、内藤氏・井上氏・安藤氏と藩主を交代しながら幕末を迎えます。

戊辰戦争においては、磐城平藩は奥羽越列藩同盟に加盟し、平城も戦場となりましたが、激しい攻撃の前に慶応 4（1868）年 7 月 14 日陥落。城には守備隊によって火が放たれました。

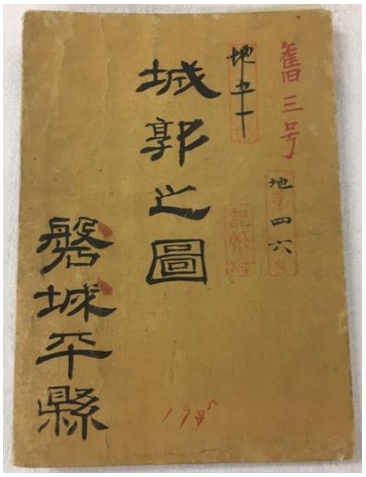
現在では本丸跡地は私有地のため、イベントが開催される際等に期間限定で公開されており、旧仮藩庁や三階櫓跡、石垣等が見られます。

【当館所蔵城絵図】

①『平城郭之図』〔出版者・出版年不明〕
75×80cm

城内の建物・石垣・堀等が、それらの規模を現す数字とともに色鮮やかに描かれています。また複数の紙片が貼付されており、戊辰戦争による焼失等の被害状況や、廃城後の土地の使途等の記載があります。

①



猪苗代城

所在地：耶麻郡猪苗代町　別称：亀ヶ城
種別：山城　規模：標高 550m，比高 28～30m

【築城】

猪苗代城は、佐原経連を初代とする猪苗代氏が代々居城にしたとされています。その築城年代については一般に建久 2(1191)年と言われていますが、会津地方の城館や柵をまとめた『会津古墨記』(文化 10(1813)年写)等後世の文献からの引用であり確証がなく、城跡の構造や出土遺物、『塔寺八幡宮長帳』等の古文書における猪苗代氏及び修復入城に関する記事から、現時点では南北朝から室町期にかけて築城されたものと考えられています。

【中世】

伊達政宗に関する記録『貞山公治家記録』において、天正 17（1589）年に伊達家と蘆名家の間で行われた摺上原合戦の場面で猪苗代城の名が登場します。猪苗代氏の支配は、伊達氏が会津を没収されるまで約 400 年間続きました。

【近世～戊辰戦争】

近世になると江戸幕府より一国一城令が発布されますが、猪苗代城は会津若松城の支城として存続が認められ、領主の有力家臣が城代として置かれました。また城の北にある見祢山土津神社には会津藩の藩祖保科正之の墓があり、墓守りが城代の重要な役割のひとつでした。戊辰戦争においては、慶応 4（1868）年 8 月 22 日、新政府軍が母成峠を突破したことを知った城代高橋権太夫が防御に不利と見て城を自焼し、土津神社にも火を放って若松に退去しています。

【近代～現在】

明治 38（1905）年、小林助治・才治父子を中心とした町内の有志が、私財を投じて城跡に桜やツツジを植栽し、東屋や観月橋を設けて公園として整備しました。現在は、平成 9（1997）年度より総合公園として再整備され「亀ヶ城公園」として利用されています。

【当館所蔵城絵図】

①『若松領分猪苗代城絵図』〔出版者・出版年不明〕160×196㎝

城内の区割及び土地の使途、建物・門・石垣・堀等の位置が詳細に分かる絵図です。山上に建てられた本丸や、城のみならず城下町の周囲にも張り巡らされている堀の様子が確認できます。城の北方には巨大な磐梯山が描かれており、存在感を放っています（表紙画像）

参考資料一覧

・『ふくしまの城 歴春ふくしま文庫 57』鈴木啓／著 歴史春秋出版 2002

・『図説 城と石垣の歴史』鈴木啓／著 纂修堂 1995

・『日本城郭大系 第 3 巻 山形・宮城・福島』平井聖／[ほか]編集 新人物往来社 1981

・『白河市史 第 10 巻 各論編』白河市／編・刊 1992

・『福島県史料集成 第 4 輯 白河風土記』福島県史料集成編纂委員会／編 福島県史料集成刊行会 1953

・『白河歴史の手引き れきしら　入門編』白河市建設部都市政策室まちづくり推進課／編・刊 2013

・『白河歴史の手引き れきしら　上級編』白河市建設部都市政策室まちづくり推進課／編・刊 2015

・『史跡 小峰城跡 保存管理計画書』白河市教育委員会／[編]・刊 2015

・『史跡 小峰城跡 整備基本計画書』白河市教育委員会／[編]・刊 2015

・『丹羽長重と小峰城』白河市歴史資料館／編・刊 1990

・『小峰城石垣』山口喜一郎／著・刊 1984

・『棚倉城』棚倉町教育委員会／編・刊 1987

・『棚倉町史 第 1 巻』棚倉町教育委員会／編 棚倉町 1982

・『二本松市史 第 9 巻 各論編』二本松市／編・刊 1989

・『二本松城 築城から廃城まで』二本松市歴史資料館／[編]・刊 2014

・『二本松市史 第 9 巻 各論編 2』二本松市／編・刊 1989

・『幻の福島城 歴春ブックレット信夫 3』村川友彦／著 歴史春秋出版 2016

・『福島城の変遷と構造』鈴木啓／著［福島板倉温故会］2002

・『中世の福島 福島城と板倉家』福島市資料展示室／編・刊 2003

・『福島市史資料叢書 第 30 輯 信達一統志』福島市史編纂委員会／編 福島市教育委員会 1977

・『史跡中村城跡保存管理計画書』相馬市教育委員会／編・刊 1996

・『福島県史跡中村城跡・外大手一ノ門修理工事報告書』
文化財建造物保存技術協会／著・編 中村城外大手一ノ門復元実行委員会 1993

・『相馬市史 4 資料編 1 奥相志』相馬市／編・刊 1969

・『相馬郷土 第 8 号』相馬郷土研究会 1993　p1-p6「中村城の沿革と価値」岩崎敏夫／著

・『平城跡 中・近世城館跡の調査 いわき市埋蔵文化財調査報告 第 117 冊』
いわき市教育文化事業団／編 いわき市教育委員会 2006

・『平城跡 旧外堀跡の調査 いわき市埋蔵文化財調査報告 第 127 冊』
いわき市教育文化事業団／編 いわき市教育委員会 2008

・『いわき市史 第 6 巻 文化』いわき市史編さん委員会／編 いわき市 1977

・『磐城文化史』諸根樟一／著 国書刊行会 1986

・『会津坂下町史 2 文化編 塔寺八幡宮長帳』会津坂下町史編さん委員会／編 会津坂下町 1976

【未見】

・『示現寺文書』（示現寺／蔵）

・『異本塔寺長帳』『白河証古文書』（内閣文庫／蔵）